

小田実全集（評論 第21巻）

被災の思想 難死の思想（上）



講談社

小田実全集

Makoto Oda



目次

- I 阪神大震災、「人災」のなかで怒り考える
 - 1 一月十七日午前五時四十六分 10
 - 2 「棄民」としての被災者 30
 - 3 「防災モデル都市」とは何か 61
 - 4 「足つぎの思想」「足つぎの文化」 88
- II 大震災を通して見えて来たもの
 - 1 「人災」としての阪神大震災 104
 - 2 「談合」政治が「棄民」政治をつくる 143
 - 3 「あちらの世界」と「こちらの世界」 182
- III 二つの「難死」体験
 - 1 「一九九五年」と「一九四五年」 198
 - 2 大震災「難死」者六千人の重み 227

IV 「戦後日本」がめざしたもの

1 「殺すな」と「体現平和主義」

2 「湾岸戦争」と「平和憲法」

V 「戦後五十年」後の日本

1 社会党の「転向」と「談合」政治

2 「良心的戦争軍事拒否国家」日本

被災の思想 難死の思想 (上)

I
阪神大震災、「人災」のなかで怒り考える

1 一月十七日午前五時四十六分

1

こうしたかたちで本を書くのは、これまでかなりの数、本を書いて来た私にとつてもはじめてのことだ。書いて、「緊急」に出版するという出版のかたちだけのことではない。わずかひと月まえ、私はまさかこうした本をこうしたかたちで書くことになるとは、それこそ夢にも考えていなかったからだ。ひと月まえ——一九九五年一月十七日火曜日未明、午前五時四十六分、誰が名づけたか知らないが、今、世に「阪神大震災」と呼ばれる大地震が起こるまえには、である。

ここひと月、私はほとんど毎日、五時半ごろ眼を覚ます。まさにひと月後の今日、二月十七日もそうだが、その一月十七日未明にも私は同じ時刻ごろ眼を覚まし、くら闇のなかでまだ少し早い仕事にとりかかろうかとベッドのなかで考えていたところですべてが始まった（今、この文章を書くのに使っている原稿用紙、万年筆のインク——二つをいつも買っていた西宮市の商店街の文房具店も先日行ってみたら、二階が一階に落ちかかるかたちでみごとにつぶれていた。愛想がよかった主人たちはどこへ行ってしまったのか。幸いなことに、新聞に出ていた五千四百余人の死者の名簿のなかに彼らの名前は出ていなかったが）。そして、正直なところ、今ひと月まえと同じベッドのなかで眼覚め、半ば起き上がってこの本を書き始めた私には（私はいつもこうした姿勢でものを書く）、またすべて、

が始まるのではないか、というおびえ、そして、やりきれない思いがある。

余震のもつとも強いのが来ると言われているのが大地震後一カ月。あるいは、このあたりの活断層は動き出している、また大きなのが来ると説く学者もいる。いつも予測をまちがえる、そして、たぶん地表の下のことは根本的なことは、何ひとつ判っていない専門家の言うことだからどこまで真実性のある話かは判らないが、玄関のまえの土地が落ち込んで「要注意」の黄色の貼り紙が玄関の扉に貼られた私の住居の集合住宅は、余震にしろさらに新たな本格地震にしろ、大きなのが起こればもはや耐えることはできないだろう。

私のベッドの横の窓からは、つい近くの倒壊確実ですでに住民が出て無人になった十一階建ての大きな芦屋の集合住宅三棟が見えるが（私の住所は西宮市だが、住居自体は西宮市の西部、芦屋市と境を接するところにある）、西宮、芦屋、神戸の大地震の起こった地域の建物は、見かけは異常なく見えても、立入り禁止になった建物はいくらでもあるし、そうでない建物でも、鉄筋コンクリートの巨大ビルディングであれ、小さな木造住宅であれ、大きな地震がまた起こればまちがはなく大半は倒壊するにちがいない。一月十七日の直下型地震で、建物であれ道路であれ、その他何んであれ、地上に存在するものすべては根もとから揺り動かされてしまっている。

一昨日二月十五日早朝、この時刻に大地震は来なかったが、電話のベルが鳴り、神戸の長田で被災したあと、濟州島について先日帰国して行った私の「人生の同行者」（つれあいのことを私はそう呼ぶ）の「在日」韓国人の年離れた父親が亡くなったという報知が来た。彼と彼の同じように年離れたつれあい、老夫妻のことはまたあとでくわしく書くつもりだが、不幸は不幸を連れ立って来るものだと今

つくづくと思う。そして、そこにそれまで押さえ込まれていた問題、矛盾が次つぎに噴出する。

もともと彼はガンの末期で自宅近くの病院に入院していたのだが、その日たまたま自宅に帰って来ていたところで被災（家は焼失は免れたが、ほとんど全壊状態で立つことだけは立っている。近所の人に救出されたとき、二階で老夫妻は何ごとが起こったのか判らない状態で杳然として向かい合わせに坐っていたという）、死傷者の続出で対応しきれなくなつた病院に再入院を断わられて、やむなく近くの小学校の避難所に同じように被災した娘たちと避難した。点滴と酸素吸入で生命をつないでいた彼の健康に、それら一切を欠いた、水とおにぎりとおパンだけの（それも十七日、十八日ごろはまったく配給されなかった）、毛布にくるまって床にじかに寝るといふ避難所の「棄民」ぐらしがいかにこたえたかは容易に想像できることだ。

彼らを運び出そうにも運ぶ交通手段がない。そのうちようやく大阪から西宮北口まで通い出した電車で、あとは二〇キロの距離を歩いて、大阪在住の娘夫妻が必要な物品をあるいはかつぎ、あるいは台車を押してそこまで運んでいたのだが、そのうちついに大阪まで八時間かかって車で運び出すことはできた。しかし、結局、万策つきたかたちで彼の出身地の養子の自宅に二月六日に「避難」して行つたのだが（その六日にも、関西国際空港でタンを喉につまらせてアワヤと思わせる瞬間があった）、十日足らずのあいだにそこで私も「アボジ」と呼ぶ、おそらく私ひとりが長年の「在日」ぐらしのなかで心の許せる日本人だった、「在日」ぐらし六十余年のひとりの朝鮮人の八十四年の人生は終つた。

葬儀はこの二月二十日に濟州島でとり行なわれるのだが、彼の七人いる娘と彼女らの夫たちは、葬

儀のために韓国へ行ける人と行けない人に政治的にくつきりと分れる。「南北」分断の悲劇がここにもあるのだ。まず行けないのは、「北朝鮮」（朝鮮民主主義人民共和国）に「帰国」して住む三女をはじめから論外としても、日本居住の他の六人の娘たちも大韓民国の旅券をもち、元来が韓国人、韓国の「海外公民」である「韓国籍」と、大韓民国の旅券をもたず、元来が韓国人でない（奇妙な言い方だが、これがこの場合もつとも適切な言い方であるにちがいない。ことはそれほどややこしく、また、べつの意味では単純だ）「朝鮮籍」に分れる。

この「韓国籍」「朝鮮籍」はともに日本政府が勝手につくり上げた分類だが、「朝鮮籍」は必ずしも「北朝鮮」に帰属することを意味せず（帰属しようがない）、日本政府はもともと「北朝鮮」の存在を法的に認めていないのだから、帰属しようがない）、ただ、韓国に帰属していないことを示すだけだが、（この理由にはいくらかもある。ひとつが、まさに「北朝鮮」を「祖国」として選びとっている場合だが、なかには、韓国、「北朝鮮」のどちらを選択しても、「南北」分断を認めることになる。それよりは全朝鮮を祖国としてとらえて、「南北統一」の日を待つという、私の「人生の同行者」がその一例だが、そうした人たちもいる）、韓国側からはどうやらすべて「北朝鮮」に帰属している人たちに見えるらしい。したがって、韓国へ渡航するということはふつうできない——というわけで日本在住の六人の娘のうち济州島での葬儀に参列できないのも何人かいる。今述べたように私の「人生の同行者」もまさにそのひとりなのだが、私たちは事情を述べて韓国総領事館と交渉することにして、今このくだりを書いてる最中に交渉を始めた。

実を言うと、三年前、一九九二年に私の本二冊が韓国で翻訳、出版されるまで（『オモニ太平記』『民

岩太閣記』——ともに朝日新聞社刊。後者は豊臣秀吉の「朝鮮侵略」を書いた歴史小説だが、前者は、「人生の同行者」の老父母の「在日」の人生を書いた随筆とも小説ともつかぬ書きものだ。今死んだ老「アボジ」の人生が老「オモニ」の人生とともに書かれている、私自身が、韓国の「民主化闘争」を支援し、金芝河、金大中氏をはじめとして数多くの「政治犯」を救援したおかげで、著書の翻訳、出版はもとより渡航ももちろんできない、韓国政府の、三年前の韓国の新聞の表現をかりて言えば、「忌避人物」だった。三年前に紆余曲折のはてに査証が出て私が渡航できたのは、それだけ韓国の政治の事情が大きく変ったことを意味している。

私も、今、「人生の同行者」とともに、「アボジ」のことを「ハルベ」（おじいちゃん）と呼んでいる九歳の娘を連れて、「アボジ」の人生のしめくりとしての葬儀出席のために出かけるつもりでいるのだが、大震災に出会って以来神経過敏になっている娘にとって、大震災に加うるに「ハルベ」の死は耐えがたいむごい体験であったようだ。報知を受けたその日一日、「どうしてこんなことが起こるの」と終日泣きくらしした彼女にとって、さらに判らないのは、彼女の母親や彼女の伯母たちの何人が葬儀に行けないというこれもまたべつの意味でのむごい現実だった。「どうしてこんなことが起こるの」とその問題についても私に同じ質問をその日くり返して発したが、私自身が同じ質問を私自身にしていた。ほんとうにどうしてこんなことが起こるのか、いや、起こったのか。大地震も、それにつづく悲惨な事態も、それにからまつての老「アボジ」の死も、さらにそこにもかかわる政治の理不尽な現実も、である。

「アボジ」はイノシシ年だった。イノシシの年には、天変地異、大動乱、大災厄が多いと人は言う。「ア

ボジ」が生まれたのは一九二一年——それは、つまり、「アボジ」の属する朝鮮が日本の植民地にされるという朝鮮民族にとつての大災厄が起こった一九一〇年の次の年だ。一歳年上の「オモニ」はまさにその大災厄の年に生まれているのだが、大災厄の結果として「アボジ」「オモニ」は日本に来て営々辛苦、空襲も風水害もその長田の家で受けて、ようやく安定した老後の生活を送り始めたところすべてが終りになった。ほんとうにどうしてこんなことが起こるのか。起こったのか。——

「アボジ」の葬儀に行けるかどうかはこの本のこのくだりを書いている時点では判らない。あとしばらくでことは決着するが、この本、決着の結果を待つて書きなおすことなく、すべて「現在進行形」のかたちで書き進めたい。第一、さつきも述べたようにまだまだ余震がつづいていなかで書いているのだ。大きなのが来たたら、私が今この本を書き始めている住居の建物もどうなるか判らないとはさつきも書いた。それは、この本の行く手もどうなるか判らないということだ。それだけの覚悟とせつばつまった気持をもって、私はこの本をあくまで「現在進行形」で、まがごとであるにせよ、よきことであるにせよ、これからの未来に私自身の存在、ありようをふくめての事態すべてを開いたかたちで書いて行くことにしたい。

そして、今、私がこの「現在進行形」の書き方の流儀を大事だと考えるのは、大地震に遭遇した人たちが私自身をふくめて共通認識のようになしてもった、人生、世界には何がどう起こるか判らない、これからどう生きようとまず根本にそうした醒めた認識をもつことだという人生、世界に対する態度に切実にそくしていると考えるからだ。たしかに、今、今もって小学校の体育館かどこかで「避難所

ぐらし」をしつづけている人たちははじめとして多くの被災者がまさに「現在進行形」で生きているのだ。すでに政界、財界、あるいは、ジャーナリズムの世界では、「復興」の構想やら新しい街づくりのための「都市計画」やらが声高に論じられているのだが、明日の予定さえ立てられないでいる人びとの多くにとつて、そうした「復興」構想やら街づくりの「都市計画」ほどかけ離れた、そして、人を馬鹿にした、大地震以来多かれ少なかれ怒りを感じてくらしで来ている人びとの怒りをさらに駆り立てるものはないにちがいない。

2

一月十七日未明のことから書いて行くことにしたい。大地震の記録の意味もあつて、記憶を喚起しながらできるかぎり正確に書き記しておきたい。

私は大地震の起こる直前に眼を覚ましている。もちろん、それはべつに予感、予兆あつてのことではなかった。その日、東京に出かける予定で新大阪からの新幹線の指定席の切符まで買っていた私は、出かけるまえにひと仕事するつもりでいたので早く眼が覚めたのだろうか、その日は娘の小学校の長い冬休みのあとの始業式の日だったので（娘の小学校は神戸大学の付属小学校で、小学校の入試の関係で他の小学校よりおそく始まることになっていた。結局、始まったのはさらにおそく二月十三日だった）、もう二、三時間おそく地震が起こっていたら途方もない結果に終っていたかも知れない。人がよく指摘するように大地震がとにかく午前五時四十六分という社会がまだ動き出していない未明の時刻に起こったことは、私一家にとつても不幸ちゅうの幸いだつた。私は新幹線にはいつも車でJRの

芦屋駅へ行き、そこからJRの電車で新大阪に出るのだし、娘の小学校は東灘の山手にあつて、そこまでは阪神電車と市バスを乗り継いで通っているので、地震がおそく起こつていれば、被害甚大だったにちがいない時刻に、芦屋といい東灘といい、いずれも被害甚大の地域で私と娘は大地震に出合つていたことになる。

さて、その五時四十六分、すべてが始まる直前に、私がまだ早い仕事にとりかかろうかとまっくら闇のなかでベッドに横になつたまままで考えていたことは先ほど書いた。とたんに激しい上下動が始まつた。地震だ、と直感してそう叫び、私は別室で寝ていた「人生の同行者」と娘の名前を必死に叫び、呼んだ。自分でも異常と感じたほどいつもちがった叫び声私の体内からほとばしり出たが、別室の彼女たちには何ひとつ聞こえなかつたのはもうそのときには万物が音をたて始めていたからだろう。上下動に激しい横揺れがつづいた。そして、瞬時に万物がベッドにまだ横になつていたままの私の上に落下して来た。私にはその実感がある。ガラスの碎け散る音とともにゴウツと深い音がした。その間十五秒ぐらいでなかつたかと思う。揺れが少し小さくなつたところで私はなんとかベッドから起き上がつて私の仕事部屋兼寢室の出口めがけて歩き出そうとしたが、わずか二メートルほどの距離が万物落下で歩けない。

まだ揺れのつづくなか、まっくら闇のなかで何がどうなつていいのか判らないままに私はもがき、それでもかなりの時間をかけてようやく部屋の外へ出ることができて、私はまた別室の家族二人の名を呼んだのだが、今度は応答があつて、大丈夫だ、と彼らは声を返した。玄関のところで私は彼らとようやく「一族再会」をはたし、私は「もう大丈夫だ」と彼らに言つたが、これは自分にも言つたこ

とばであったかも知れない。とたんにまた揺れがかなり大きく起こった。「余震だ」と私は言い、「アツパ（は、日本語で言うなら「おとうちゃん」にあたる朝鮮語だ。日本人と朝鮮人のあいだに生まれた娘は父親の私のことをそんなふうと呼ぶ。母親のほうは「オンマ」、つまり、「おかあちゃん」だ）、こわい」と抱きついて来た娘に「もう大丈夫だ」とつぶけたが、これもまた私自身にも言ったことばだった。何がどうなっているのかまだ暗くて判らない。懐中電灯も見あたらない。「待て、もうすぐ明るくなる」。私はまた二人とともに自分を励ますように言った。

少年のころの空襲の記憶がよみがえって来ていた。靴を穿け、とすぐまた私は二人、いや、私自身をふくめて三人に言った。ガラスの破片が散乱している、ケガをする。そう手短かに理由を言ってから、服を着ろ、とつぶけた。三人がそれぞれに身づくろいをすませてから、私は玄関の扉を開けて一方がベランダ状に開いた廊下に出た。いろんな人がそこに出ているだろうとの予期は外れて、廊下にも下方の（私の住居は五階にある）集合住宅の玄関、駐車場にも人影ひとつなかった。三十分ほどあとでは、人びとは外に出ておたがいの無事を確認し合っていたから、まだそのときには、人びとはそれぞれ住居でただ呆然としていたにちがいない。生きのびたよろこびを感じとるにはまだ少し時間がかかった。廊下には非常ベルの音だけがむなしくひびきわたっていた。あとは消防車やパトカーのサイレンの音ひとつせず、あちこちに火焰と黒煙とが上がっているのが見えたが、あたりは異常に静かだった。そして奇妙に全体が空っぽになっている、そんな感じがした。まるで私たち一家だけがこの世界に取り残されたような孤独感、それも私は感じた。廊下に横倒しになっていた消火器の筒をたて直して、私はまた住居に入った。

「電気がついた」と「人生の同行者」が叫んだ。たしかに右手前方の芦屋浜の埋め立て地の高層の集合住宅のあちこちに電気がつくのが見えた。私は停電のなかで切っておいたわが住居のスイッチを押した。当然のように電気がついた（水道の水も蛇口から流れたが、これは屋上のタンクからの水で、あとしばらくしてとまり、現在に至るまで一滴も出て来ない）。しかし、もうそのときにはかなり明るくなって来ていて、灯火の助けをかりなくても、わが住居の内部の惨状も明瞭になった。

まず、居間ではガラス扉の入った大きな重い書棚が三つともに倒れ、別の部屋でも同じ大きく重い書棚がこちらは机を押しつぶして倒れて、本やら書棚の上に載せてあった、そして、今はただ「瓦礫」と化した朝鮮の壺やら中国の唐三彩の人形やら本が散乱して足を踏み入れることもできない。居間のテレビジョンの受像機は上に載せたビデオの設備とともに二メートルほど飛んで、その「瓦礫」と本の散乱のなかに埋れている。台所の食器棚は倒れはしなかったが、中身は大半出て、たいていが砕け散った（「人生の同行者」は、彼女が長年世界のあちこちで貰ったり買求めたりして集めて来たグラス類が砕け散るときの音を「天来の妙音」として聞いたと言う。そして、おかげで、今物に対する執着がみごとになくなった。そう彼女は言う）。

私の部屋も惨憺たるさまを呈していた。大きく重い書棚が二つ、ひとつは一回転して倒れ、もうひとつ、さらに大きく重いのがベッドの上の私を直撃するかたちで落下して来ていた。ベッドの横の大きなコピー機が私を護ってくれていなければ、私はまちがいに死んでいるか、重傷を受けていたにちがいない。そのとき重傷ですんでいても、当時の混乱した状況のなかではとうてい満足すべき治療は受けられなかったにちがいないから、あとどうなっていたか判らない。

ようやく少し落ちつきを取り戻したところで、私は近くに住む姉やさつきから述べて来た神戸の長田に住む者「アボジ」「オモニ」をはじめとして何人かの知己、友人に電話したがすべてかからない。仕方がないので私は「人生の同行者」と娘を連れて近くの、私の書庫でもあれば、姉の住居でもある集合住宅に出かけたが、その集合住宅は廊下が裂けていた。応答がないままになかへ入ると、そこはつくりつけの書棚がどれもこれもみごとに倒壊して一面の本の山だ。姉がその山のなかに埋れているのではないかと叫び、探したがいない。思いついて、さらに近くの姉の友人宅へ行くと、姉はそこにいて無事だった。

偶然、前夜、その姉の住居の暖房がうまくきかず友人宅に来ていたというのだが、おそらくこうした偶然の幸運は逆の偶然の不幸とあいまってその日多くの人たちに共通してあったことだろう。私はそこではじめてテレビジョンで、わが住居のつい近くの高速道路の倒壊のさまをはじめとして各地の被害の状況を見て、地震がいかに大きく激しいものであるかをあらためて知った。そこまでたどり着くまでも、私は私の住居の集合住宅の玄関の地盤が大きく裂けていることから始まって、道路の崩壊、住宅の倒壊のさまをつぶさに見て来ていたのもかわらず、地震がそれほど巨大な規模のものであったとは十分につかめていなかったように思う。これは当事者には、眼前の事態の対応に追われて全体の姿かたちがよく把握できないという、こうした大災害にありがちな事態のひとつの例であつたにちがいないが、そのときすでに時刻は七時になっていたかと思う。

それはあとから考えると、すくなくとも当局者の言うことを信じればの話だが、村山富市首相が全体の状況の悲惨についての報告を受けたのとほぼ同じ時刻だった。私は事態の重大性を今さらのよう

に感じとつて衝撃を受けたが、そのときでも「人にやさしい政治」を標榜する政治家村山首相はまったく予定を変更することなく財界人との朝食会にそのまま出かけて行つたはずだ。私自身をふくめて、多くの人が、いったいこれからどうすればよいか、と思ひ惑つているなかにおいてのことだ。いや、それどころか五千人余の人がそれこそひとりひとりが生き埋めの状況のなかでなんとか必死にもがいているさなかにおいて、社会党委員長でもある首相はなんら予定を変えることなく、経済界の人物、世の金持ちたちの代表との朝食会にのぞんだ。すべてが、多くの人が生きる予定さえ変更させられてしまつているさなかにおいてのことである。

3

十七日未明、私の住む西宮から芦屋のあたり、建物であれ、道路であれ、建物のなかの書棚であれタンスであれ、地上の万物は東から西へ動いたようだ。私の住居の内部のさまばかりでなく、街の被害のさまもその様相を呈していた。墓石の倒れ方から、大地震の被害地域の神戸の中央部から西方にかけては地盤は南から北へ動き、神戸市東方から芦屋、西宮にかけては西から東へ動いたと推測する学者がいるのをテレビジョンの画面で私は見かけたが、その推測通り、私の住居のあたり、たしかに地盤は西から東へ動き、逆に地上の万物はすべて東から西へ動いたものだと見えた。私を殺しにかかった書棚もまちがいなく東方から西方へ倒れかかつて来ていた。ついでにもうひとつ専門家の意見を紹介しておけば（正直に言えば、私は今やこの種の専門家の発言には、必ずマユにツバをつけて聞くことにしている。地下のもろもろのありよう、その動きについて、根本的なことは何ひとつ彼らには判つ

ていない。それも多くのことがらとともにこの大地震のなかで判ったことだ。私は昔から片桐ユズル氏の「専門家は保守的だ」という詩が好きだが、彼のユーモラスな詩につけ加えるかたちで「専門家はマユツバだ」と題した詩を書きたいと考えている。いや、もつとはつきり言つて、「専門家はウソつきだ」である。ただ、片桐氏の詩のようにユーモラスに書くには、私はあまりにも怒つている。ただ、保守的であることは、たぶん、人を殺さないが、専門家のウソつきはそのまことしやかな専門のウソによつて、人を殺す。この大震災のなかで実際に殺した、彼らの意見に基づいてつくられた活断層の動きの地図によれば、私はそれを新聞で見ただけのことだが、動きの末端は私の住む西宮と芦屋が境を接するあたりから東方へかなり行つたところにあり、動きがもつとも激しいと見られる地域へは海岸ぞいの私の住居から北へ少しの距離だ。

私が実際に歩いてたしかめたところでは、私の住居から一〇〇メートルほど北に行つたあたりから確実に活断層の動きに乗つていたと見えて軒なみの家屋の倒壊が始まり（北方四〇〇メートルあたり）の地域——小さな木造家屋が密集していた、皮肉にも「屋敷町」という名のついた一角あたりでは八十人ほど人が死んでいる）、東方二キロメートルほど、阪神西宮駅そばの商店街の東はずれあたりでその激しい倒壊の地域は終つている。そして、北方へは仁川あたりまで激しい倒壊の地域が伸びているのだが、それは活動層の動きがそちらにむかつていたことを示していたにちがいない。ただ、被害は建物の構造の強弱とともに建物直下の地盤のあり方によつて大きくちがつていて、西宮に限らず芦屋、神戸の被災の現場に行つて気がつくのは、わずか二、三〇メートルの距離のちがいで、一方がだいたい無事に家屋は立っている、他方はすべて倒壊しているというぐあいになつていくことだ。これ

には直下に活断層があるかどうか、その動きがどうだったかということ以外に、もつと複雑に地盤は強弱、入り乱れてあるという事情があるにちがいないが、そんな些細なこととはもちろん専門家の「マクロ」の視点での被害地の視察では視界に入つて来ないことがらであるにちがいない。そんな些細なことが、人間ひとりひとりの生き死にの問題にまでかかわつて来るのだが。――

たとえば、神戸有数の商店街元町通りの商店がおおむね無事で、いち早く再開にこぎつけたのに対して、つい近くのセンター街では商店の多くが倒壊している。同じことは私の住居の近くでも言えて、私の部屋の窓のつい近くに見える十一階建ての大きな集合住宅三棟が倒壊確実なのに対して、そのまへの建物は無事だ。さつき私の姉の住居の惨めなさまを私は書いたが、彼女の住居は私のところよりも東方にあるのだし、さらに東方、まわりにはたいして被害の出ない甲子園あたりでも、大きな集合住宅が倒壊してかなりの数の死者を出している。

結論して言えば、個々の建物の強弱の問題はたしかにあるとしても、地表の下のことのありよう、そこでの動きのことなど、まずほとんど判っていないということだろう。判っていないところで、小さな計算をやつてのけて建物をおつ立て、道路をつくつて来たというのが現状であるにちがいない。多くが倒壊した木造の古い住宅のことだけが問題ではない。大地震のなかでコンピューターや何やらで強度を計算して来たはずの最新の建物やら道路やらが倒壊したこと――これを私たちは正面きつて問題にしなければならぬところに来ている。

私の住居のベランダからつい近くに芦屋浜の埋め立ての人工土地の「シーサイド・タウン」の高層住宅群が林立しているのが見えるが（全体で五十二棟。なかには高さ八六メートル、二十九階建て、

七〇メートル、二十四階建ての超高層が計十二棟ある)、その安全のかんどころとなつたはずの、外からいかにしたものもしげに見える太い鉄骨支柱が、二十四階建て超高層三棟をふくむ二十一棟で計三十九本が破断している。あたりの建物は七、八階建ての中層の住宅をふくめてあちこちで液状化現象で傾いているが、「超高層ビルは安全だ」という認識、あるいは「神話」を根底からくつがえすこの鉄骨支柱の破断は重大な問題であるにちがいない。「シーサイド・タウン」の超高層住宅は、建てられた当時は大きく評判になつて、来日していた鄧小平氏までが視察にやつて来て、中国にもこうした建物を建てるべきだと言つて帰つた、「地震波」のシミュレーションをやつて設計した、建設省の外郭団体「日本建築センター」の大学の先生方のきびしい審査を通過して、一流中の一流の建設会社竹中工務店の設計、施工で建設したあと、建設省の「建設大臣賞」までもらつた——というたぐいの賛辞に満ちた建物なのだが、この超高層建築の損壊は目立っていて、私の住居のベランダからでもそのさまが見えるぐらいだ。

今「シーサイド・タウン」の住民一万三千人のうち七、八割が「自主避難」しているという話で、そのあたりに行つてみるとまっ暗だし、私の住居から見てもかつては灯火がまばゆくついていた高層住宅には今はチラホラとしか灯火はついていないが、竹中工務店は、「これで倒壊しないことが実証できた」と開きなおつているのだから世話はない。当然、この世界でも初めてのことだという超高層建築の鉄骨破断は徹底して究明すべきことであるのに、竹中工務店はやばやと切断面を熔接でふさぎ、周囲を鉄板で補強するというかたちで「証拠」を湮滅いんめつしてしまつた。ここらあたり、車の通行中の倒壊のおかげで夫や父親を失つた遺族たちの抗議を無視してたちまち倒壊した高速道路を各所

で撤去してこれまた倒壊の「証拠」を湮滅してしまった道路公園を思わせる所業だが、神戸の六甲アイランドやポートアイランド、あるいは三宮の市庁舎の超高層建築の場合、鉄骨支柱は覆われてしまっている、切断しているのかどうかさえが判らない（このあたりの記述は「日刊ゲンダイ」95・2・23による）。

この芦屋浜の超高層住宅群の被害について、さらに後日、「毎日新聞」（95・3・23）によれば、二十四階建て住宅四棟に二百九十九戸が入居する第一住宅の住民組織「住宅管理組合復旧委員会」は、「一部倒壊」とした芦屋市の判定はまちがいが、被害は「全壊か、それに相当する被害」であるとして、市に再調査を依頼した。その「毎日新聞」の記事は、再調査のやり方についての記事で、再調査の結果、どうなったかはその記事からは判らないが、明瞭にうかがえるのは、この竹中工務店ご自慢の建物の被害が甚大であること、建物の安全性はとも自慢し得るものでないことだ。

記事をそのまま引用しておこう。まず、十九階の部屋についてである。「居間中央部の床にはたわんで天井を支える金属パイプ二本が目につく。周囲二〇センチを超える太いパイプは、建物の施工主の竹中工務店が設置した、という。壁には数多くの亀裂が走る」。ついで、六階の部屋。「ここではコンクリート製の天井が約四〇センチ四方にわたって崩れ、鉄筋がむき出しになっている。住人のひとり『鉄筋は壁際までつながっている。心配だ』と訴える……」。たしかにこれでは「一部損壊」どころか「半壊」、あるいは「全壊」だろう。そのどれにしたって、このままでは住めるものではない。「これで倒壊しないことが実証できた」などと勝手なことを言っている場合ではない。たわんだ天井を支えるパイプのそばで住め、というのか。まず、竹中工務店の社長一家が住んでみるべきだ。つい

でのごくに言っておこう。建設会社のおえら方の邸宅は、同じ神戸、芦屋あたりの山手にあったが、よほど堅固に建てられているらしくて、ビクともしなかつたという話だ。

この芦屋浜の高層、超高層建築の鉄骨支柱は、もともとコンピュータの計算によると、地震の場合、鉄骨支柱が伸びて耐えられるようになっていらいが、今度の大地震の場合、伸びるまえに急激な引っぱり力で切れてしまったのだというのだから、現代科学技術の最先端の「小ざかしい計算」がまったく役に立たなかつたという事実のひとつの象徴的な事例だろう。

さらにこの芦屋浜の人工土地がらみで言えば、今さかんに被災地の廃材やら瓦礫やらを液状化で半ば裂けてしまった道路をトラックで運び、夜ごとさらにその先の広大なまだ無名の埋め立て地（これも液状化でむき出しの「原野」があちこちで裂け、一時泥海であつた）で夜ごと盛大に燃やしてるのだが（そのさまは私の住居から、まさに地獄の火焰のさまとして望見できる）、芦屋浜からその新しい埋め立て地までをつなぐ、できたばかりでまだ開通していなかった最新式の橋の橋脚も崩れれば、さらには、そのあたりの、これは九四年に開通したばかりの湾岸道路の橋脚も傷つき、そしてまた、これもまた私の住居からつい近く左手に望見できる西宮浜（右手は芦屋浜である）の人工土地に至る、こちらは、これも九四年開通の最新技術の橋として知られた「西宮大橋」の橋桁も落下して、今は名物だった橋の上の巨大なアーチも撤去されて姿を消している。もうひとつ言っておくと、この西宮浜でも、夜ごと被災地の廃材の焼却は地獄の焰をあげて行なわれている。

こうした事例はまさに「小ざかしい計算」がいかに役立たずのものであつたかを示す事例だが、さらに興味ぶかい実例をあげておけば、大阪と神戸をつなぐ阪神間の交通機関のうち、もつとも新しく

て最新技術を駆使したはずの新幹線の高架は落下し、高速道路は各地で崩壊、落下もすれば派手にひっくり返り、湾岸道路は私の住居の直前で橋脚が傷ついて通行不能になったのに対して、より古いJR、阪急、阪神の三線は、もちろん、破壊されたが、まだしも、かなりな部分がちこたえて、すでにその部分では電車の運行も再開している。ことに強かったのは建設がもつとも古かったJR線だった。この皮肉な事実はここで特記しておきたい。神戸市内を貫通して走る交通機関を見ても地下鉄線は手ひどくやられたが、コンピュータによる「小ざかしい計算」などなかった時代の、ただ古風、律義に橋脚をとる狭きまで並べたJR線の高架線がもつとも堅固で、地震後いち早く開通することができた。

「小ざかしい計算」でことにひどかったのは、倒壊の「証拠」を湮滅してしまった「阪神高速」と呼ばれる高速道路だった。活断層に問題あり、との主張もなされて大きく反対運動が盛り上がったのをふり切るようにして強引につくられたこの高速道路がいかにもまちがったおそろいものであったかは、派手に連結したかたちでひっくり返ったそのさまがテレビジョンで放映されて今や天下周知の事実だが、かわいそうなのは、この高速道路の存在、破壊のおかげで、高速道路が通る四三号線の道路わきの建物、家屋に倒壊が多いように見てとれることだ。べつに統計の数字があるわけではないが、私はあちこち歩いてみて、そうした観察結果をもった。言ってみれば、高速道路の倒壊、あるいは、傾斜に引きずられて建物、家屋が多く倒壊しているのだ。これらの建物、家屋の人たちはこれまでも高速道路の車の騒音に十分に悩まされて来たにちがいない。そして、とどめの一撃が高速道路に引きずられての倒壊である。この事態について専門家の言うことはまことに簡単だ。「要するに、地震が大

きすぎたのだ」。それかあらぬか、最初は「震度6」と言っていたのが、いつのまにか「7」に地震は格上げされた。

そして、テレビジョンの番組で、威丈高に開きなおつて、もつと安全なものをつくれとおっしゃるならつくつてみせる、しかし、それには金がかかるので経済面で問題がある、金をかけてもよいという「国民」の合意が必要だ、とのたまう専門家もいた。まるで悪いのは、そういう単純なことも判らぬ「国民」だというぐあいに「国民」に責任をなすりつけるような言い方だが、彼の言い分がかりにもつともだとしてもひとつ留意しておきたいのは、彼をふくめて彼ら専門家のほうからこれまで一度もそうした問題提起がなされたことはなかった、そのことだ。

災害が起こつてから専門家はいろんなことを言い出すものだと「阪神大震災」のなかで私がつくづく思ったことだが、ひとつの例をあげておけば、「ポートアイランド」「六甲アイランド」「芦屋浜」「西宮浜」など神戸、芦屋、西宮の埋め立て地でござつて地表に海水が噴き出て泥海に化するという「液化現象」が起こつたとき、多くの専門家がこうしたことははじめから予期されていたことだと言ひ、なかには、こうした埋め立て地は五十年経つて地盤が落ちついでから建物を建てるものです、としたり顔に主張する人もいた。

すべてもつともな言説だと言いたいのが、問題はどうかしたもつともな言説を彼らが埋め立て地をつくるまえに、あるいは、その直後、そこにおつ立てられた集合住宅やら事務所用の建物やらの売り出しが始まるまえに口にしなかつたかということだ。私はかつてこうしたやみくもな埋め立て地の造成がいかに危険に満ちたものであるかを公けの席で論じたことがあるが、私の主張に対して、現

代の土木工事、土木工学はもつと進歩していますよ、と言われたことがあった。もちろん、この発言をした専門家（というものであつたかと思う）の今言うことも決まっているにちがいない。ひとつが、「こんな大きな地震が起こると思つていなかった」なら、他のひとつは、「そりやもつと安全でいいものをつくつて上げますよ、その代り高くなる、それでもいいですか」だ。つまり、人工土地の上の集合住宅の値段が三倍にも四倍にもなるというのだろう。「そんなに高くていいですか」——この脅迫めいた設問には、「じゃあ、そんな集合住宅など無理して建てなくていい」と答えることができる。いや、さらにいい答は、「そんな人工土地などはじめからつくらなければよい」だ。

2 「棄民」としての被災者

1

大地震から一週間経って、私は地震後の混乱のなかで、ある雑誌に次のように書いた。

「今、私一家の生活はこうなっている。

朝は九歳、小学校三年生の娘とともに海岸に出て、便所の水洗用の海水をバケツでくんで運び、午後は彼女の母親をふくめて一家三人総がかりで近くの井戸へ行き行列をつくって大中小さまざまな容器に井戸水を詰めて帰って来て五階まで階段を上る。水は私にとつてさえ重い。私が、重いバケツをさげて階段を歩いて上る娘を励ますつもりで、昔はこんなふうにして水を運んだものだと言うと、彼女は、いつの時代？」と反問する。さあ、と私は口ごもる。電気は幸いに来ているが、食事は毎日インスタント食品の食事。顔はまれに洗い、風呂、洗濯はもちろん論外。食器は紙で拭う。余震が切れ目なくつづいているので、夜は、着衣のまま玄関で寝る。娘は早くパジャマを着て眠りたいと言う。

彼女の学校は被害甚大だった神戸の東灘の山の中腹にあるのでいったいそこがどうなっているのかがまったく判らない上に、たとえば学校の建物が『健在』であったところまで『阪急』『阪神』『JR』の各線すべて不通、復旧の見込み立たずで行けるはずもない。そしてもし、学校の建物が『健在』

なら、そこは『避難所』となって毛布にくるまった被災者たちがひしめきあつてくらしているにちがいない。」

「この九歳、小学校三年生の娘がこの生活に耐えているのは、そうしたもつとひどい状態にいる人たちのことを知っているからだ。彼女の同級生のなかには家がつぶれてどこかの『避難所』に入っているのが何人かいるし、彼女の組の担任の先生は彼の住む建物が倒壊したときに負傷して親類のもとに避難している。いや、問題はもうひとつある。これは娘にかぎらず彼女の両親の問題でもあるのだが、友人、知人、級友、先生との消息が、この直後、交通手段の徹底した破壊のなかで多くが判っていないことだ。負傷した娘の先生の消息も、『避難所』に入っている彼女の級友の母親がようやくつながった電話をかけて来て判ったことだ。

『避難所』に入っているのは彼女の級友だけではない。第一、焼野原と化した神戸の長田に長年住んで来た『在日』韓国人の彼女の祖母たちとともに長田の小学校の『避難所』にいる。彼らの家は燃えてはいないが、全壊している。そして、なかでも私たちが特に案じているのは八十四歳になる娘の祖父のことだが、彼は末期ガンで入院していたのを、死傷者続出で、病院を追い出されたのだ。このところ少しは改善されたと見えるが、毛布はようやく行きわたったものの、食事は水とおにぎりとパンのみの、コンクリートの床の上に人びとが寝ているという『難民』の領域をこえて文字通りの『棄民』のくらしはひとときわこたえるに決まっている。

彼らへの『救援』の物品を持って、大阪に住む彼らの娘や娘の夫が電車がそこまで動く西宮北口まで電車で行き、そこからは荷物をかつぐなり、台車に載せて押すなりして二〇キロ余を歩いて長田の

小学校にまで達する。同じ西宮北口から私の友人が何人かリュックをかついで私のところにまで、『救援』物資を、歩いて一時間半の距離を届けてくれた。まえもついても彼らは容易にかからぬ電話で、今、何が欲しい、と聞く。水だ、と私の答は決まっている。」「群像」95年3月

私がこう書いてからひと月近くが経っている。いろんなことがそのあいだにあった。私と私の家族にとつてもつとも大きなまがごとは、すでに書いて来たように、娘の祖父母が万策つきたかたちで濟州島に帰り、祖父がそこで「在日」何十年の人生を終ったことだ。いいこともあった。電車で動ける範囲も大きくなつたし、郵便も来れば、電話もかかるようになった。なかでもつともよかつたのは、娘の学校が二月十三日になって十時始業、授業時間二時間の変則のものながら、再開したことだ。その前々日までに学校の近くまでとにかく「阪神」と「JR」は動くようになったし、何よりよかつたのは、多くの学校で先生にも生徒にも死者を出しているのに（私の住居のつい近くの小学校では、校舍はつぶれ、生徒は死者六人を出している）、彼女の学校では負傷者はいたが死者は出なかつたことだ。校舍も同じ敷地に立つ中学校は破壊されて使用不能になつたらしいが、彼女の学校には、ほとんど被害はなかつた。ただ、それでも、先生、生徒、それぞれに手ひどい体験をもつたことにおいて変りはなかつたにちがいない。

娘の同級生には、家族五人が倒壊した家屋の屋根のスキ間から脱出して、屋根の上で五人が抱き合ったという体験をもつた子供もいたし、ほとんど全員が「避難所」ぐらしの体験をしていた。その感想——「二度といや」。学校では、何人もが、先生も生徒も「避難所」から学校に来ていた。学校自体が「避難所」になつているので、何人もが「避難所」から「避難所」に来ることになるのだが、い

つも儀式が行なわれる体育館は「避難所」になっていたので校庭で行なわれた始業式では、彼自身が自宅全壊の被害者の、教頭格の「ベテラン」の先生が、その日朝からみなさんに何を言おうかと考えて来てあれこれ準備して来たが、今、元気で私のまえに立っているみなさんの顔を見たら、言うべきことばはこれしかない、そういう気持ちになったと前おきして、みんな生きていてよかった、これからこのことを大事にしてみんな生きて行こう、と言ったのがよかった、と娘も娘に付き添って学校に行った。「人生の同行者」も帰って来てまず私に告げた。

しかし、私たちはいぜんとして水とガスのない生活をしている。ことに水がないのがこたえる。それに、いつときは、わが集合住宅全体の便所の排水管がつまり、「大」は新聞紙でくるんでことをすませ、「小」は風呂場でするといふようなことまでやっていたので、水の問題は骨身にしみた。そして、火事がこわくて炊事にはガスボンベの火も使えないので、食事はいぜんインスタント食品ですませている。それでもようやく給水車が一日に一度はやって来てくれるようになったので助かるが、水を運ぶ作業はいぜんとしてしんどい。やって来てくれる給水車はわが西宮市のものではない。三重県久居市というような、私にとっては戦争中闇食糧の買い出し地として名前を記憶する小さな地方都市の給水車が、今私の集合住宅の住民の生命綱——つまり、このところにわかにはやり出したことばの意味がもとのものとは大いにちがっている和製カタカナ英語を使って言えば「ライフ・ライン」だ（それにしても、奇妙なことばがはやり出したものだと思う。それもまさにその実体が私たちにとってなくなったときにはやり出した。テレビジョンの画面などで、したり顔に「ライフ・ライン」がどうしたこうした、というようにあれこれしゃべるキャスターやら「ゲスト」の先生やらを見ていると、あな

た方にいったいその問題が判っているのか、とどなり出したい狂おしい気持になる)。

久居市の給水車の人たちは泊り込みで西宮市にやって来てくれている。彼らは水源地近くの事務所
でザコ寝をして、毎日、西宮市民に水をくばりまわる。彼らの努力にはまったく頭が下がるが、それ
にしてもわが西宮市の給水車はいったいどこへ行ってしまっているのか、いや、そもそもこの市には
給水車は何台あるのか、人口四十万で年間予算一五二五億円のこの全国有数の金持ち都市は人口たぶ
んわずか数万人の久居市がその人口比でもっているほどの給水車をもっているのだろうかと訊ねたく
なるのは、西宮市の年間災害対策費が四五〇〇万円しかないこと、そして、非常備蓄用の食糧その他
が文字通りゼロであることを私が知っているからだ。いや、もうひとつ、これもまた全国有数の金持
ち都市、人口八万の芦屋市は、給水車をみごとに一台ももっていない——その事実もここで書いてお
こう。

2

しかし、もちろん、水という「ライフ・ライン」ちゅうの「ライフ・ライン」がなかるうと、「大」
を新聞紙でくるんでことをすませようが、玄関が大きく落ち込んで「要注意」の紙を貼られようが、
私の一家は住居を失っていない。その一事だけでも、被災後ひと月余経つても(この私の文章、「進行形」
で書いているので、書く時点もそのときどきによつてちがって来ている。書くことの中身の基本は変
らないが、そのときどきに言及する事態も事態が言いあらわす数字も変化する。その変化も基本と
もに大事にして書いて行きたい) いまだにどこかの小学校の体育館か何かで、あるいは公園にテント

をはって、いまだに「避難所」ぐらしや「テント村」ぐらしをつづけている二十万人近い被災者たちに比べて比較にならないほどまだ。

まず書いておきたいのは、一月十七、八日にはろくに毛布もあたえられていなかった、食物もパン一切れだった、一家族にバナナ一本だった、それももらえず代りに翌日には必ず優先的にバナナ一本が渡されるというしるしの赤札をもらった、そのあとも水とパンとおにぎりだけの食事がずつとつづいたという彼らの生活は、ここで全国からの「救援物資」の到着、同じように全国からやって来てくれた「ボランティア」の活動もあつてかなり改善されて来たとはいえ、基本的にはまったく変つていないことだ。「ボランティア」について少し書くことにすれば、これは「ボランティア」自身の問題ではなく、それによりかかつて自分の責任軽減をはかる政治の側の問題だが、今、私が気にかかつていることは、「ボランティア」活動が政治の怠慢、無責任を隠蔽する楯として使われてしまうことだ。あるいはまた、「ボランティア」の活動がどうしても神戸のようなジャーナリズムの世界で大きくその悲惨が取り上げられた地域に集中して、「途中」の同じ神戸でも灘、東灘、あるいは芦屋、西宮その他の地域への救援活動がおざりにされてしまうことである。外部からの「ボランティア」はまったく来なかった、「救援物資」もすぐに届けられなかったという無名の小さな「避難所」はそうした地域でいくつもある。こういうところへの救援は、十七日の当初からまさにそうであったように近所の住民たちの、これまた文字通りの「ボランティア」活動に頼るほかはないが、住民自身が被災者なのだから、活動が十分とは行きかねるのは当然のことだ。

私自身、私の家族に届けられた「救援」の物品をそうした「避難所」に届けることをやって来たが、

もちろん、量は十分でないし、運搬手段がないので、歩いてかついで行くより術すべがないのだ。そうした無名の、小さな「避難所」ぐらしの被災者には、大きな「避難所」ならときには鳴り物入りで提供される移動の風呂ももちろんやつて来ないが、わが家に彼らを招いて、風呂に入ってくれ、と私は言うわけにはいかない。水とガスのないわが家で、私自身が風呂とまったく無縁のくらしをしているのだから。救援物資を運ぶ車がどれもこれもさつき述べた地域のような「途中」を無残に通過して行つた——とはこのあたりの人たちがよく言うことだ。私の住居のすぐそばの道路が突然そうした車の通行のための「幹線道路」となつてそうした「通過」のさまをいつも見ていた私には、こうしたこの地域の住民の思いはあながちひが目に基づいた思いではないような気がする。

ついでに言つておくと、「通過」車輛の大部分が大企業のものでつた。自らの会社の被災した社員たちのために「救援物資」をせつせと運んでいたにちがいない。大阪のホテルがいち早く大企業によつて「借り占め」されてしまった事実とともに、これは私にあらためて「会社国」「大企業国」「日本株式会社」としての日本のありようを感じ、考えさせるいい機会になつた。そして、この「日本株式会社」は神戸市の「神戸株式会社」と呼ばれたこれまでの政治とまさに直結している。段ボール箱か何かでなければなしの「壁」をつくり、床にじかにフトンを敷いて毛布にくるまつて眠り、ときどきの「ボランティア」による「炊き出し」が提供する温かいお茶や食事以外は、水と牛乳とパンとおにぎりとお弁当屋の弁当の冷たい食事をとるといふ「難民」、いや、「棄民」ぐらしの基本的ありようは、このくらしが始まつてひと月余経つた今も何ひとつ根本的に變つていない。そして、このくらしのなかであらさまに読みとれるのは、できるかぎりすべてを安上がりやすがりに、簡便に、ことばをかえて言えば手を

抜いて、そして全体の機構に摩擦を起こすことなく、矛盾を解決、あるいは、押しつぶし、押しかくして何ごともなかったかのようにことをすませるという行政、政治の姿勢だ。この姿勢の犠牲になるのが「避難所」の被災者で、彼らのくらしはおかげでますます「棄民」のくらしになる。例はあまたある。ありすぎるほどある。

たとえば、まず食事だ。ある新聞の報道によれば（「産経新聞」95・2・27）、神戸市以外の兵庫県下の自治体の「避難所」の食事の「指導」をしている兵庫県健康課（それにしても、私は不覚にもこの「健康課」というすばらしい名前をもったお役所の存在を知らなかった。しかし、これはいったい何をするところだ。私の「健康」にいかなる関係をお役所のお役人たちはもっているのか）の話によっても、「避難所」の食費は一日ひとり当たり一八〇〇円は必要、被災者の健康状態がそれ以下では心配で、病院でも一九〇〇円までは健康保険でまかなえるのでそれぐらいの金額は出しているということなのだが、神戸、西宮両市の「避難所」の食費は一日八五〇円、芦屋市が少し多くて九〇〇円、尼崎市は逆に少なくて七〇〇円、宝塚市に至っては最低の六八〇円だ。どうしてこうした悲惨な（被災者にとってである。市にとってではない。市にとっては、支出が少なくてそれだけけっこうなことだろう）ことになっているのかと言うと、災害の被災者の食費に対する国庫補助が一日八五〇円におさえられているからにちがいない。つまり、各市ともピタ一文自分のふところは痛めたくないのだ。雲仙普賢岳噴火の場合、長崎県島原市は、神戸、芦屋、西宮、尼崎、宝塚市などよりはるかにゆたかではないはずの市だが、すぐに一日一四五〇円に食費を増額、同県の深江町に至っては一日一八〇〇円を使うことにしたというのだから、これはまさにひどい話だ。

そして、さらにこう書いていても腹だたしくなるのは、この災害対策法による一日三食八五〇円という金額は、一週間程度の「避難所」生活を予想したもので、長期化した場合は厚生省に申請すれば増額も可能であるからだ。島原市も深江町も厚生省の認可を得ないまま増額を決め、数年後に国の補填が認められたというのだから、その二つの自治体は神戸市、西宮市などに比べると数等ましな人間がお役人になつている市だろう。逆に言えば、わが地域のお役人は数等下等人間であるということになる。金額のことは以上書いた通りだが、ちつぽけでゆたかでない自治体のお役人たちより人間として数等下等人の日本有数のゆたかな都市として知られた都市のお役人たちは、人間がふつう一日三食を食べる存在であることを忘れているらしくて、昼食にパン（西宮市）、あるいは、おにぎり（芦屋市）を出す二市を除いて、神戸、尼崎、宝塚の三市では、昼飯はただ「なし」。

ついでのことには、五市の一日の献立を書いておこう。神戸市——（朝食）パン、牛乳。（昼食）なし。（夕食）弁当、ミソ汁。以上につけ加えて、週に一度サラダや野菜ジュース。芦屋市——（朝食）パン。（昼食）おにぎり。（夕食）ご飯、おかず（どんなおかずだろうか）。そして、毎日、野菜サラダがつく。西宮市——（朝食）パン、牛乳。（昼食）パン。（夕食）弁当。尼崎市——（朝食）パン、ジュース。（昼食）なし。（夕食）弁当。二月二十七日から週数回、朝食に牛乳。宝塚市——（朝食）パン、牛乳。（昼食）なし。（夕食）弁当。これも二月二十七日から弁当の野菜を増やす。

この食事の本身がまさに水とおにぎりとおパンだけだった当初となんら本質的に変わっていないことはこの「献立表」とは決して言えないものから容易に判ることだが、さすがに「神戸市民生局災害対策本部」も事態の改善をもくろんでいるようで、「一日二食の問題や栄養面での改善、食費の増額を現

在検討中」ということだが、このことばには、「しかし、業者の供給能力の問題もあり、もう少し時間がかかる」という重大なつけ加えがつく。しかし、神戸市に弁当を供給しているある業者は、「三食を供給・配達するのも可能。生野菜などを別パックにして送ることも十分できる」と言っている。うだから、「民生局災害対策本部」のきつきのことばは自らの人を人とも思わぬ「棄民」政策をくりますますマヤカシでなかつたら、ただの真赤なウソだ。

3

私は「避難所」の食事のことだけに文句をつけているのではない。一事が万事、そこにはつきり読みとれる「棄民」政治を問題にし、怒っているのだ。人びと、市民の存在、生存、生活を無視し、いや、踏みこじつてまでも自分の都合、利益に基づいて進行する政治、経済——この基本は、大災害のそもそもの始まりから大災害後の現在に至るまですべてに共通している。これまで基本のこれまた基本にあったのは、開発——乱開発に基づいての経済の発展、それからからみついた政治。そして、この基本の基本は、大地震後の今、「復興」のかたちをとる。そこでまたしても無視、踏みこじられるのは、市民の存在、生存、安全、生活だ。

なにしろ、この兵庫県は、地震直後の一月十九日、まだ多くの市民が生き埋めになっているさなかに、これからは「人命救助」より「復興」だ、と知事が公言した県だ、ことは極端にあらわれもするが、中央政治も負けてはいない。災害対策では意思疎通もままならぬかたちで、「人にやさしい政治」どころか、「人にむごい政治」の証拠を残酷にさらけ出した村山富市首相ひきいる政府（この「人に

むごい政治」の社会党出身の首相は、大地震の通報を受けたあと、財界人との「朝食会」に予定を
かえずに出席したというのだから、知事と好一對のアタマの持ち主なのだろう。も、首相の諮問機関
として「学識経験者」を集めて「阪神・淡路復興委員会」をつくり、さらにはこちらはお役人主体の
「阪神・淡路復興本部」を手早くかたちづくった（「復興」以外のもうひとつの政府の関心事は「危機
管理」だろう。「危機管理」体制の抜本の見直しを進める民間人主導の「防災臨調」（仮称）も近く設
置する予定だと新聞が書いていたが、これも手早くやっつてのけるにちがいない）。

こうした地元政治、中央政治にまたがった動きの基調は、これまでの開発Ⅱ乱開発経済、発展の
基本はまちがっていない、さらにそれを強力に推し進めて「復興」をはかるといふものだろう。と
にかく乱開発の主役だった知事も神戸市長も、自分たちの推進して来た都市計画はまちがっていな
い、途中で地震という「天災」によって推進が妨害されただけのことだ、「天災」は人智をこえている、
その予想もしない巨大なものが来たのだから、誰にも責任はない、対応がはじめはたしかにまずかつ
たが、それは認めるが、どこの国のどの社会でも、これほどの巨大な「天災」が来れば多少はオタオ
タする、このオタオタするところを助けたのが、いや、助けるべきなのは（そうこのあいだもテレビジ
ョンでアメリカ合州国かどこかの長年の「ボランティア」活動家も言っていたではないか）「ボランティ
ア」たちの活動で、これもよくやった、おかげで今はすべてがよくなった、もう過去をふり返つてと
やくく責任を問うているべきときではない、よろしく明るい明日を語るべし、明るい明日にむかつて
の「復興」を語るべし——というのがここににある論理、倫理の展開であるにちがいない。

つづきは製品版でお読みください。